

Eureka III

六年制通信 No. 25 平成27年11月28(土)号

二つの意向

最近立て続けに面白い本を読みました。戦後史の関係が中心でしたが、全く色合いの違うものに筒井康隆の『アホの壁』もありまして、これは息抜きに丁度良い本でした。笑いました。前に一度読んでいたのですが、改めて笑ったわけですね。このタイトルは少し前に流行った養老孟司の『バカの壁』のパロディーにしか思えませんが、中身はまずまず「真面目なアホの考察」です。筒井康隆は読んだことがありますか。小松左京、星新一と並んでSF御三家と呼ばれている作家です。君たちの親御さんならドラマになった『七瀬ふたたび』や映画になった『時をかける少女』の作者としてご存じかもしれませんね。私は『俗物図鑑』『大いなる助走』から始まって若い頃にかなり読んでいますが、何と言っても『文学部唯野教授』と『残像に口紅を』が一番良かったな。この2冊を書いて筒井さんは胃潰瘍で入院しています。詳しく知りたければ自分で読んでみて下さい。入院中に耽読したハイデガーの『存在と時間』に関する講演もありまして、テープに残っているようです。興味があれば探してみなさい。

それで、その『アホの壁』ですが、その中にフロイト (Sigmund Freud 1856-1939) の「二つの意向の干渉」の話が出ていまして、非常に懐かしく思ったわけです。ジグムンド・フロイトは言うまでもなく精神分析学の巨人ですが、夢判断だとか無意識の領域とかいった新しい概念をとらえたオーストリアの学者です。フロイト以降、人間の行動は全て分析できることになったようです。分析できるということは、数値化できるということ、すなわち測定を基本にして物理学の領域になったということですが、本当ですかね。私は素人ですが、実は怪しいとにらんでいます。それはともかく、私たちの意識していない領域が自分の行動を支配するというフロイトの考え方は、確かに魅力的でしょう。無意識の研究から現実の言動（つまり性格）を解明するために、彼は様々な用語を作り出しました。その中の一つに「異なる二つの意向の干渉」というのがあります。筒井さんがこれに触れていたわけです。例えば、大嫌いな人と待ち合わせをして一緒に仕事に行くはめに陥った場合、一回目は場所を間違えて会えず二回目は時間を間違えて会えなかったことがあった、とこれは筒井さんの体験ですが、この失錯行為（失敗のこと）は異なる二つの意向の干渉の結果であるというのがフロイトの解説です。その相手と会わないといけないうのが第一の意向で絶対に会いたくないというのが第二の意向です。この二つが干渉しあった結果、会えなかったという失錯行為そのものを利用し、何とかして大嫌いな相手と会いたくないという意図を達成した。『アホの壁』にはそういった解説がしてありました。わかりやすく書いて

ありますが、フロイトの学説として正しい理解だと思います。もっと他の、けっこう笑える例も紹介されていますから興味のある人は読んでごらん下さい。新潮新書です。

さて、久しぶりに二つの意向の話を書いて私はもちろん君たちの顔を浮かべていたのですよ。君たちにとって、第一の意向は言うまでもなく「勉強しなければいけない」です。これは疑いのないことと信じます。問題は第二の意向です。これが「やっぱり勉強したくない」あるいは「絶対勉強したくない」さらに「絶対勉強だけはしたくない」となって、これが第一の意向と干渉すなわち戦った結果、現在の君たちの行動が決まっているのではないかと思います。そう考えると恐ろしすぎて身がすくみませんか。

無意識の領域で勉強を拒否してしまうと、実際の行動もそうなるというのですから困ったものですが、そんな分析をして納得していても始まらないので、無意識に打ち勝つ努力をしなくてははいけません。簡単な話は、第一の意向が激しければ第二の意向に負けないのですから、強く「勉強する」決意をすることが基本になります。フロイトは「行動の目的」をはっきり認識することを説いていますが、確かにこれも有効です。自分が、たとえ嫌いでも、勉強しているのは何のためか、そこに意義を見つけていれば自ずと目の前の二択（勉強するかしないか）を選び間違ふことはないはずですから。

目の前の二択で思い出しました。朝礼でも少し触れましたが、フロイトより二千年以上前の古代ギリシャ世界において面白い概念がありました。ダイモンの声と呼ばれるものです。ダイモンとは現代語ではデーモンと言っていますが、神と人間界の中間に位置する死者の霊などを指しています。それで、例えば旅人が二股に分かれた道のどちらにいくべきかを迷ったようなとき、ダイモンにお伺いを立てるわけです。そうすると心に声が聞こえると。右に行くべきか左に行くべきかという間に、ダイモンはどう答えるかが面白いのです。ダイモンは例えば右に行ったほうがいいと言いたい場合でも「右に行け」とは言わず「左には行くな」という言い方をするのですね。これはもう必ず否定語を使って「〇〇はするな」という表現しか使わないのです。勉強しましょうか遊びましょうかなら、きっと「遊ぶな」でしょうね。不思議な物言いだと思いますが、私が昔恩師から伺ったところによれば例外はないそうです。しかし、否定的な声であろうと肯定的な声であろうと心の中にダイモン（のようなもの）を持つことは、日常の反省にはいいことです。実際に声を聞くということも有効でしょうが、実はもっと大切なことは、目の前に二者択一が迫ったときに、そこで落ち着いて考えてみることなのだと思います。ダイモンは古代ギリシャの産物ですから君たちには語りかけてくれないかも知れません。でも、耳を澄ませば何らかの指針が見えてくるかも知れないですからね。

フロイトの語る恐怖は、目の前の選択を人は無意識に行ってしまうということでしょう。だからこそ、日常の行動を常に点検する必要があるわけです。無意識にストップをかけることを「内省」と言うのですが、自分のしていることは、あるいは今日したことは実は「するな」と言われていることではないのかと問うのです。そして二つの意向の干渉を意識するだけでもずいぶん違うと思いますよ。